

2026年1月発行

茨木御堂
第305号



真宗大谷派

茨木別院

(輪番 河原 恵)

〒567-0817 茨木市別院町3-31
TEL (072) 622-2903
FAX (072) 625-9445

南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていこう

みんなに願いがかけられている

茨木別院令和の大改修



弥陀の誓願

不思議に

たすけられ

まいらせて

(『真宗聖典』第二版 七六七頁)

新年、明けましておめでとうございます。
二〇二六年(令和八年)は、茨木別院の本堂が再建されてから二五〇年目にあたります。

昨年(令和七年)の一月に本堂の改修工事を始め、今年の十一月には工事が完成することになっています。工事を請け負ってくださった株式会社金剛組さんは、世界最古の企業であり、一四〇〇有余年の歴史を持つ宮大工の職人集団です。また、仕事は丁寧で、技術力も高く、金剛組さんに本堂の大改修をお願いして本当によかったと思っています。

人の一生もそうです。建物もそうですが、いろいろなことがあり、順風満帆とはいきません。何かを成し遂げることが、人を助けることも、心穏やかに一生をおくることもたやすいことではありません。しかし、どれだけ困難であったとしても、いのちをいただいた限り私たちはその中を生きていかなければなりません。

それでは、どうすればよいのでしょうか。それを解く鍵が次の言葉にあります。

弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて念仏もうさんとおもいたつころのおこるとき、すなわち撰取不捨の利益にあずけしめたまうなり。

(『真宗聖典』第二版 七六七頁)

これは、歎異抄第一章の冒頭にある言葉です。

自分の力ではどうすることもできないにもかかわらず、不思議にも事は前に進んでいきます。私を超えた願いと力が、不思議にはたらいて、この大改修を進めてくださっているのです。この誓願と自在神力にすべてを任せ、弥陀を信じ、御名を称え念じることによって、どんな困難も抜けていける人生を利益としていただきます。そのことで、安心の中に我がいのちを生きる者となるのだと思います。

南無阿弥陀仏 輪番 河原 恵

茨木別院関連ホームページ

真宗教団連合ホームページ

茨木別院 → ibarakibetsuin.or.jp

<http://www.shin.gr.jp/>

いばらき大谷学園 → ibarakibetsuin.or.jp/kids/

真宗教団連合

検索

茨木別院 月行事のご案内

●修正会(しゅしょうえ)

- ・日時 元日(木) 午前零時半頃より
- ・会場 茨木別院会館

●本山九日講初講・九日講総会

- ・日時 九日(金) 午前十時より
- ・会所 茨木別院会館

- ・講師 真宗大谷派参務

※初講に引き続き総会を行います。

●親鸞聖人御命日・二十八日講報恩講

- ・日時 二十八日(水) 午後一時半より
- ・会場 茨木別院会館
- ・講師 茨木別院輪番

●教如上人ご命日・五日講

- ・日時 五日(木) 午後一時半より
- ・会場 茨木別院会館
- ・講師 加藤 恵氏

●本山九日講

- ・日時 九日(月) 午後二時より
- ・会所 教行寺(高槻市富田町六-10-1)
- ・講師 茨木別院輪番

●親鸞聖人ご命日・二十八日講

- ・日時 二十八日(土) 午後一時半より
- ・会場 茨木別院会館
- ・講師 茨木別院輪番

月忌参りお休みのお知らせ

1月1日(木)から、1月5日(月)までの月忌参りは、お休みさせていただきます。

●茨木別院令和の大改修

茨木別院本堂の改修工事は、施工業者の株式会社金剛組より、順調に進捗しているとの報告を受けております。本堂は、今年十一月に改修工事完了を予定しています。昨年(令和七年)の報恩講では現場見学会を開催し、参加者の皆様に工事の進捗状況をご覧いただきました。

ご門徒・崇敬寺院の皆様にお願しております。御懇志については、一般の方々を含め、皆様のご協力により約四、八〇〇万円のご寄進をいただきました。心より御礼申し上げます。

また、ご懇志は三年間という期間でお願いしております。目標金額達成に向けて、引き続き茨木別院令和の大改修にご協力賜りますようお願い申し上げます。

○御懇志目標金額 一億 円

○ご依頼期間 令和九年(二〇二八年) 六月迄





園の子どもたちへ

いばらき大谷学園



新年あけましておめでどうございませう

二学期もたくさんの方々の行事があり、それぞれの得意分野で立派な姿を見せてくれました。年長さんはみかん狩り、年中さんはお芋ほり…と味覚狩りもあり、様々な経験をしました。

作品展では「小さな世界」というテーマで関西万博を題材に様々な国をイメージして各学年で試行錯誤しながら作品を作りました。色々な国があることを学び、発見し、自分たちで考えながら作っていました。それぞれの作品もみんな一生懸命取り組んでいて、全園児で作った大屋根リングは圧巻の出来栄えでした。廃材のご協力ありがとうございました。

音楽会は、二学期の終業式後、クリエイティブセンターで行いました。いつもとは違うホールでの発表に緊張していましたが、素敵な歌声や息を合わせた合奏を披露してくれました。フィナーレでは幼児組全園児と職員で『世界中の子どもたちが』を手話を使って歌いました。たくさんの方々の保護者の皆様に観覧していただき、子どもたちはとても嬉しうでした。仕事の都合をつけていただいた方も多いと思います。ご声援やたくさんの方々の拍手をありがとうございました。

今年度も残り三カ月となりました。進級するイメージを膨らませながら三学期も元気いっぱい過ごしてほしいと思います。ひまわり組・幼児組は最後の大きな行事・おゆうぎ会があります。お友だちと協力し、みんなが主人公として役になりきって演じる姿を楽しみにしていきましょう。

本年もどうぞよろしくお願ひします。

木村千夏

新しい年を迎えて

副園長 久保 幸子

新年あけましておめでどうございませう。本年もどうぞよろしくお願ひいたします。

一月は、新しい年の始まりですが、園生活においては、三学期、つまり、現在の学年において、最後のしめくくりの始まりでもあります。

四月から、新しい学年になり、たくさんの方々の経験をし、成長してきた子どもたちにとっては、次の学年に向けて、そして、年長組の子どもたちにとっては小学校入学に向けての大事な準備期間となります。

子どもたちの中にも、一つ大きくなるんだ、お兄さん、お姉さんになるんだという気持ちが生まれ、苦手なことにも挑戦してみたり、もしかしたらできるかも？という気持ちが自然と芽生えてくるようです。

ご家庭でも、お子様と一緒に、この四月からのことを思い出しながらお話しをしたり、次はこんなこともしたいな、あんなこともできるかも？と目標を立ててみるのはいかがでしょう？

そうして一年間の経験や成長を振り返ることが、この一年間の「まとめ」となり、やってみたいなと思う気持ち、次の学年へつなげていくための「準備」となります。

新しい学年へつなげていくための大切な、この三学期、有意義に、楽しく元気に過ごしていきましょう、お手伝いできればと思っております。



二〇二五年十一月十四日 速夜法話

「仏教における信仰の問題」(一)

講師：宮下 晴輝 師

(大谷大学名誉教授)

親鸞聖人の仏道の動機

今回は「仏教における信仰の問題」というテーマで話します。今日は、報恩講でありますので、まず親鸞聖人の教えを仰ぎ訊ねたいと思います。それから親鸞聖人の仏道の教えの背景になっているお釈迦さんを訊ねていきたいと思っています。

親鸞聖人は、二〇年ほど比叡山で仏道を学ばれ、二九歳の時に山を下りられて、法然上人のもとに行かれて、弟子になられます。それはどうしてだったのでしょうか。そのことについて、奥様である恵信尼のお手紙が伝えられています。

親鸞聖人がご生涯を終えられたのは、今から七百五十年以上前の一二六二年です。親鸞聖人が生涯を終えられたとき、おそばにおられた娘の覚信尼が母である恵信尼にお手紙を出しておられ、その返事のお手紙が残っています。そこに、親鸞聖人が山を下りて吉水を訪ねられ、法然上人にお会いになったことが記されています。

「山を出でて、六角堂に百日こもらせたまいて」、比叡山を下りて京都の六角堂にこもられたのです。そして「後世を祈らせたまいけるに」、後世を祈るために六角堂に百日こもられた。「九十五日のあか月、聖徳太子の文をむすびて、示



現にあづからせたまいてそうらいければ」、聖徳太子が夢にあらわれ一文を示された。その示現にあづかった文の意味をたずねてと思われませんが、「後世のたすからんずる縁にありまいらせん」とたずねていって、法然上人にお会いになったのだとあります。

それから、六角堂に百日こもったのと同じように、また百か日、降る日にも照る日にも、いかなる大事にも、法然上人のもとにお参りにいかれた。そして法然上人は「ただ後世のことは、よき人にもあしきにも同じように、生死いづべき道をばただ一筋に仰せ」になったのを、親鸞聖人はそれを「うけたまわりさだめてそうらいしかば」とあります。

法然上人は、ひたすら生死いづべき道を仰せられたのだと、親鸞聖人から奥様は聞いておられたわけです。そしてそれを親鸞聖人は、なるほどその通りだと確信された。そして法然上人が行かれるところには、他の人がどんなふうにも言われなくても、たとえそれが悪道や地獄に落ちるようなことがあるとしても、自分は「世々生々にも迷いければこそありけめとまで思いまいらする身なれば」と、これまでもずっと死んでは生まれ変わりを繰り返してきた身なのだからと、さまざまに人たちが言うことに対して同じようにお答えになった、と記されています。そして、法然上人の門弟になったわけです。

後世を祈る

親鸞聖人は、法然上人から、生死いづべき道を教えていただいた、とお手紙に書かれていました。それをたずねる前に

確かめておきたいことがあります。聖人が六角堂にこもったのは「後世を祈らせたまいけるに」と、後世をお祈りになったのだとありました。また「後世のたすからんずる縁に」あいにいこうとたずねて、法然上人に出会った。そして法然上人は、「後世のことは、よき人にもあしき人にも同じように、生死いづべき道をば」ただ一筋にお説きになったのだとありました。このお手紙の一段に「後世」ということが三度も出ています。

法然上人の門弟の中で、親鸞聖人がとても大事に尊敬された先輩に、隆寛という方が、『後世物語聞書』を残されています。親鸞聖人は八〇歳過ぎの頃に書き写しています。そこに、「後世者」「念仏者」と、後世を祈るひとたち、念仏するひとたちとあります。その人たちは、「いかにしてかこのたび往生ののぞみをとぐべき」ということを課題にしていたのだとあります。恵信尼のお手紙にも「世々生々にも迷いければ」という親鸞聖人の言葉がありましたように、ずっと迷いの中にあつて苦しんできた、迷いの人生を送ってきて、今生まれてきた「この生涯で」「この人生で」ということを、「このたび」と受けとめているのです。それが「いかにしてかこのたび往生ののぞみをとぐべき」とあるのです。それが、念仏者、後世者の心にある課題です。現代のわたしたちは、「後世」というと死後の生涯のことだと考えてしまいます。しかし「後世を祈る」とは「往生ののぞみをとぐる」ことで、なんとしてもののぞみをとげようと祈ることです。それを「いかにしてかこのたび」と言っているのです。ですから、

何もせず何も考えずにほうっておいてもやってくる死後の人生のことなどではないのです。ほうっておいてもやってくる死後のことであれば、そこでも「いかにしてかこのたび」と後世を祈ることになるでしょう。「このたび」が、いつまでも未来に引き延ばされていくことになります。

親鸞聖人も、そういった意味では後世者として、後世を祈るといって往生ののぞみをとげようと六角堂にこもられたと考えていいと思います。どうして往生ののぞみをとげることができるのかという問いにもなります。そのえで、法然上人から聞いて教えられたのが生死いづべき道であつたということなのです。

法然による生死を離れる道についての教え

「生死」とは中国に仏教が伝わってきてその漢訳者たちが受けとめたことばです。だからインドの原典に「生死」とあるわけではありません。仏教の課題を「生死」と受けとめたのが漢訳者たちです。一番最初の紀元後二世紀の漢訳からこれが使われています。これが中国に伝わり日本にきた仏教の伝統です。

まず、「生死を離れる道」については、法然上人の著書『選択本願念仏集』（『選択集』ともいう）にあります。その『選択集』の結論は「総結三選の文」といわれます。親鸞聖人も、それを『教行信証』で引用されています。

その最初に「それ速やかに生死を離れんと欲わば」とあります。だから法然上人の仏道の課題もここにあるのです。な

ぜ仏法を学ぶのか、それは生死を離れんと欲うからだ。だからすみやかに生死を離れようとするのならば、こうであると説かれているのです。「三選」と、三つの選びがあるわけです。まず二つの勝れた教え、聖道門と浄土門の二つがある。聖道門はさしおいて、浄土門を選びなさい。浄土門に入ろうとするなら、正雑二行のなかの、雑行をすておいて、正行を選ばないとならない。正行を修せんとおもうならば、三つ目の選びになります。助業をかたわらにおいて、選びて正定業を専らにすべしと、正定業を選びなさいと。その正定の業とは何かというと、仏の名を称する、念仏、これが正定の業です。仏の名を称えることは必ず生まるることを得ると。生まれるとは往生をとぐるということです。仏陀の世界に生まれることです。称名によって生まれる、念仏して往生するということです。その仏の名を称すること、称名によって生まれるというのが仏の本願だからであると。

これが法然上人の『選択集』で言わんとする結論なのです。冒頭の「生死を離れんと欲わば」という、生死を離れるということが、法然上人にとって、仏道を歩む課題であったと受けとめられます。だからそのための道を諄々と親鸞聖人に向かつてお説きになったのちがいありません。だからまた、生死をいづる道、それは念仏だということになります。

往生をとぐるということ

では「往生」ということを、親鸞聖人はどのように受けとめられていたのか、『歎異抄』で伝えられている「往生」に

ついて確かめたいと思います。『歎異抄』は、親鸞聖人がお弟子さんに直接にお話しになったことですから、受けとめやすいと思います。

まず、信心ということと往生との関係について、第一条は、「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて往生をばとぐるなり」と信じて念仏もうさんとおもいたつころのおこる」とき」という冒頭から始まります。なんともいえない手ごわい文章です。ただここで「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて往生をばとぐるなり」とまずあって、すぐ続いて「往生をばとぐるなり」と信じて念仏もうさん」とあります。信仰の構造、信心の構造が、順を追って語られています。

弥陀の誓願不思議を信じると。本願を信じて念仏を申すという、それが親鸞聖人の信仰です。本願を信じて念仏申す、そういう信心です。本願を信ずる心で念仏を申すというのです。そして、念仏申さんものは、それは法然上人の『選択集』にあつたように、名を称えるものが、生まれる、往生するということなのです。この第一条では、名号を称えるものをおくわんというその本願を信じて念仏申さんというところがおこるとき、撰取不捨の利益にあづけしめたもうとあります。ここに真宗の教えのすべてがあるわけです。

次に第二条の「おのおの十余か国のさかいをこえて、身命をかえりみずして、たずねきたらしめたまう御ころざし、ひとえに往生極楽のみちをといきかんがためなり」と、これは親鸞聖人のおことばです。親鸞聖人の晩年に息子の善鸞が、関東の門弟の前で、自分だけが父親から大事なお聖教の教え

を聞いているのだと、門弟たちを惑わすという事件がおこり、聖人は息子の善鸞を義絶するという事件が背景にあります。門弟たちが親鸞聖人に会いに京都までやってきます。唯円もまた、身命をかえりみずして、たずねきたらしめたまうた門弟の一人であったのでしよう。彼が聞いた言葉がそこに記してあると考えられます。

親鸞聖人は唯円たちに「ひとえに往生極楽のみちをときいかんがため」にやってきたのであらうと確かめています。「しかるに念仏よりほかに往生のみちをも存知し、また法文等をもしりたるらんと、こころにくくおほしめしておわしましてはんべらんは、おおきなるあやまりなり」と。そして「親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべし」と、この法然上人の仰せを信ずるほかに別の道などないのだと、門弟たちに答えています。念仏のみが往生の道だとそういうふうにならわたりは聞いてきている。だからわたしは念仏のみだと言いつつ切っています。

往生極楽という言葉について

中国で「往生」と漢訳された語は、実はインドの原典では「生まれる」という言葉です。「生まれる」ということを「往生」と漢訳したのである。

いろいろな漢訳を見ると、「天に生まれる」「天に往生する」とあります。死んで神々として生まれるのです。インドの神々のことを、中国では「天」と訳しました。人間より上等で、美しく、善きものたちであります。そして天に生まれ

るということを、往生するとも漢訳しています。また、天に往生するだけではありません。地獄に生まれることも、往生すると訳しています。したがって「往生」という言葉に何か特別な意味があるわけではないのです。

では『歎異抄』の「往生をとぐる」とは何を表しているのでしょうか。それは、第二条に「往生極楽の道」とありましたように、「極楽に往生する」という問題なのです。「極楽」というのは名前です。阿弥陀仏の世界、阿弥陀仏の浄土を、「極楽」と呼ぶのです。そして、仏陀の世界を「浄土」ともいいます。その浄土に生まれるということ、ここではその生まれていく世界を省略して、「往生」とだけ言っているのです。

「浄土」とは、「仏土」「仏陀の世界」という意味です。その「仏土」について、天親菩薩は、「そこに仏陀が出現するから、仏土というのだ」と注釈しています。「土」とは、田畑、フィールドという意味です。そして、「仏土」とは、たとえば稲田ということと同じである」と喩えています。稲田に稲があるように、仏土に仏陀が現れるということです。そこにいけば仏陀にお会いすることができるということです。「仏陀にお会いする」ということを問題にしているのです。仏陀に出会うということが大乘仏教のテーマであります。大乘経典はすべて、いかにして仏陀に出会うのか、いかにして仏陀と離れないものとなるか。それが大乘仏教を生み出したテーマなのです。そしてそれがここでは「往生をとぐる」という課題となっているのです。

〈完〉

〈令和八年度

(二〇二六年度)年回表〉

- ・一周忌 令和七年亡
- ・三回忌 令和六年亡
- ・七回忌 令和二年亡
- ・十三回忌 平成二六年亡
- ・十七回忌 平成二二年亡
- ・二十五回忌 平成一四年亡
- ・三十三回忌 平成六年亡
- ・五十回忌 昭和五二年亡
- ・百回忌 昭和二年亡

※年忌法要は、なるべく一ヶ月前までに御来院いただいで日時等ご相談下さい。

〈合祀納骨案内〉

■特別納骨

納骨料…五〇万円

■個別納骨

納骨料…三〇万円〜一〇万円

*法名プレート刻銘料三万三千元が別途必要となります。

■合同納骨

納骨料…七万円

●茨木別院事務所

☎〇七二一六二二二九〇三

敬 弔

ご生前のご遺徳を偲び、
謹んで哀悼の意を表します。(敬称略)

記

●法名 釋樹心

俗名 吉岡虎夫 一〇〇歳

●法名 安養院釋証果

俗名 境田吉男 七〇歳



明けましておめでとうございます。

昨年新たに増設いたしました合祀墓につきましては、多くのお問い合わせをいただき、早速ご利用いただいております。

須弥壇納骨につきましては、現在改修工事中の本堂が完成次第、再びご利用いただけるようになる予定です。改修工事は金剛組により十一月頃の完成を予定しております。その後、本堂内陣を京仏具小堀に戻していただく予定となっております。恐れ入りますが、須弥壇納骨につきましては、今しばらくお待ちくださいますようお願い申し上げます。

本年も引き続き、改修工事の期間中ではございますが、各法要を勤めてまいりますので、何卒よろしく願ひ申し上げます。
竹内明人

株式会社 花 廣

— 生花・供花・けいこ花 —

茨木市大手町一二一八
☎〇七二一六二二二四〇二